第 3 号

日付　2018 年 10 月 10 日
発行者：斎藤　純

上智大学理工学部経営者の会　通信

■　インド通信　（3 号）
□　東北通信　（　号）
□　大阪通信　（　号）
□　東京通信　（　号）

●近況

インド通信担当の斎藤です（81 物理卒）。日本からインドでの「ものづくり」ビジネス拡大を支援しており、時折出張しております。最近インドを訪れる日本のビジネスマン、ビジネスウーマンが増えてきているようで嬉しく思っております。

先月の出張時には、定宿とするホテルの近辺で SUSHI Restaurant ***Coming Soon !*** の貼紙を発見いたしました。

●サビエル師は、なぜ日本へ？

さて、前号の終わりでフランシスコ・ザビエル師について触れましたが、なぜ師は遠路はるばる日本にまでやって来たのでしょうか。また、なぜ来ることが出来たのでしょうか。

師はキリスト教の布教を使命として故国スペインから訪印し、熱心にイエスの教えを説いて回ったようです。その成果で信徒は順調に増えていったそうです。ところが、そんなある日、彼の目前では十字架に祈りをささげているインド人達が、彼がいない時には、ヒンドゥー教の神々を崇めていることを知ってしまいます。インド人達はキリスト教に改宗したのではなく、彼の前では、その「そぶり」をしていただけでした。 実は現代のビジネスにおいても、インド人はすぐ「Yes, sir」と言いますが、心底は異なるようで、言うだけで何もやらないケースが多々あります。師もさぞやご苦労されたのだと思います。日光東照宮の三猿も、そもそもはインドが起源という説があります。表面的には同意しても、心根は変えない頑固なところと自分達の文化への強い誇りがインド人にはあります。

傷心の師は、偶然その地で日本人（アンジローまたはヤジロウ）と出会い、日本でならキリスト教を広められるのではと、彼とともに日本へ渡ってきたとのことです。安土桃山時代のインドに日本人がいたとは驚きですが、どうやら罪を犯して船に隠れたところ、それはインドのゴアに向かうポルトガル船だったとのこと。その後の、日本での師の活躍はご存知の通りです。上智大学の設立も師の志が元になったと聞いております。アラビア海沿いのリゾート地として知られる美しい町ゴアで、ザビエル師はミイラとなって保管されおり、10 年に一度公開されます。

ゴアのホテルの庭園

現代インドの三猿

現代インドの三猿は、東照宮とは正反対で、「よく見て、よく聞いて、よく話せ」と言っているようです。インドも変わり始めているのでしょう。

●マハトマ・ガンジー

イギリスからの独立を勝ち取った人物としてあまりにも有名ですが、武力闘争ではなく、市民運動によるイギリスへの「非暴力、非服従」という方法を貫いたところは、まさに神仏の国「天竺」、ゴダイゴが歌った「素晴らしいユートピア、ガンダーラ」でしょうか。彼がムンバイでの市民運動の際に滞在した家は、マニ・バワン記念館として、そのまま残されており、入場無料の博物館になっています。中には、彼の一生を再現した精巧な人形が並び、順に見ていくと彼の生涯を知ることが出来るようになっています(下の写真です)。

首都デリーの国際空港は、インディラ・ガンジー空港という名称ですが、この方は後に首相を務めた女性で、マハトマさんとの血縁関係は無いそうです。

●ナレンドラ・モディ首相

モディ政権は、インドの改革を急速に推し進めています。インドをよく知る友人によれば、いよいよ「巨象」が本気モードになってきたのではないかとのこと。地方選挙でもモディさんの政党は勝ち続けており、当面、政権は安定していると言えます。彼の改革の実例をいくつかご紹介します。

1.　公衆トイレの設置

インドの一般家庭では、テレビはあってもトイレは無い家が多く、人口の 70%の人々が「屋外」で用を足していました。ヒトの排泄物が上水道に混ざってしまうこともしばしばと聞いておりますが、現在、使用料 2 ルピー（3.5 円）の公衆トイレが次々と道路沿いに設置されています。その数はすでに 2000 万ヶ所以上とか！ スケールが違いますね。

2.　スラムの撤去

下はスラムではなく、普通に見かける街角の風景、右下がスラムの家です。

私見ですが、スラムの住居の特徴は、歩道、（高架）橋の下、公園の一部など公共の場所を占拠していることだと思います。昨年 12 月、ムンバイ大学周辺の歩道を占拠していたスラム街に突如として重機が入り、1 日でそれらを撤去してしまいました。空港周辺の高架橋下も同様でした。「この国は急激な変化を嫌うのだ」と感じていたので驚きました。他の日本人駐在員の方々も一様に驚かれていました。

3. メトロ工事

さて、上記の強制撤去を実行したのは、メトロの建設工事開始が理由でした。日本の ODA（供与額 1,000 億円）で急速に工事が行われています。昼間だけ行うこれまでと違い、2 年後の完成を目指し夜間も工事を行っています。

デリーでメトロに乗りましたが、乗車を待つ人は日本方式でホームに整然と並んでおり、降車の人が出てから、待っていた人たちが乗車するので、全く違和感がありませんでした。

右写真がメトロ、右下はドアを開けて走る従来の電車です。

4. 新幹線

これも日本方式が採用され、最大都市ムンバイとモディさんの地元（グジャラート州の州都）アーメダバードを結ぶ 500km が着工になります。用地買収でまだ揉めているようですが、開通目標は 5 年後の 2023 年とのことです。

このように、インドは急速に変わり始めています。日本を追い越し、米中に次ぐ経済力を持つようになるのも、遠い先のことではないようです。

5. ヒンドゥー至上主義

正直なところ、こればかりはちょっと歓迎できません（モディさん、ごめんなさい）。ムンバイでは外国人を含め、牛肉を所持すること、食することが禁止されてしまったからです。また、主要道路から500m圏内での酒類の販売、提供も昨年４月に禁止されました。飲酒運転撲滅のためだそうです。道路沿いのワインショップは廃業に追い込まれ、道路近くに立地する主要ホテルでも酒類は提供できなくなりました。ビール，ワイン、ウイスキーなどを買うには、主要道路から相当離れたお店まで行くことになり安全面で不安でしたが、日々のアルコール燃料が欠かせない小生は、毎週末、徒歩 30 分ほどのところにある店まで買いに行っておりました。500m 圏ギリギリに立地するホテルでは、道路寄りの門をコンクリート塀で塞ぎ、わざわざ反対側に門を新設して、「500m」を稼ぐなど、涙ぐましくも笑える努力をして、何とか酒類を提供しようとしました。 そして、日本企業専用工業団地でも同じことが・・・・・。団地の中ほどに、日本人出張者用のホテルがありましたが、正門を塞いて塀を作り、道路から最も遠い場所に新規に門を作って、500m を確保して酒類の提供を継続しようとしたのです。このような対策で OK となった所もあれば、努力むなしく却下された所もあったようです。また、境界線付近の建物の中では、１階の店では酒類が出せなくなっても、２階、３階の店は OK というケースもありました。

ところが、この規制は、施行後半年しか経ていない 9 月、あっさり撤廃となりました。噂では、大幅な税収減を引き起こしてしまったためとのこと。 あれは一体何だったのか・・・・という思いはあるものの、撤廃大歓迎！でした。

なお、実は牛肉を食べられる店がムンバイにも 1 軒だけあります。どういう理由か存じませんが、アメリカ領事館のすぐ近くのブラジル料理店です。美味しくて値段も手頃なため、外国人で賑わっています。(上の写真)

6.　法律の改廃

「酒類禁止令」の例に限らず、インドではどんどん法規が作られ、改定され、廃止されていきます。消費税率の改定など日本では国会で議論が重ねられ、多くの時間を費やしていますが、インドでは昨年 7 月、新間接税 GST が導入されました。日本の消費税・サービス税に相当するのですが、基本税率 18%です（高級品・嗜好品は 28%、一般大衆向けの食材は 0%など幅が広い）。施行してみて、問題が生じたらどんどん修正するという基本姿勢らしく、実際、この 1 年で数回、税率の変更や除外対象の見直しが行われています。

7.　高額紙幣の突然の廃止

インドの高額紙幣は 1,000 ルピー札と 500 ルピー札の 2 種類でした。日本で例えれば、1 万円札と 5 千円札といったところです。

2016 年 11 月のある晩、夜 8 時のこと、突然テレビでモディさんによる記者発表がありました。

曰く、「明日午前 0 時（すなわち発表の 4 時間後）を以て、2 種類の高額紙幣を廃止する。新紙幣を発行するので、銀行で交換してください。期限を過ぎると旧紙幣は無効になります。」 この時点で新紙幣は、まだ印刷もされていませんでしたので、翌朝から町は大混乱となりました。 前号で、インドでは田舎暮らしの人が 90%を越えると書きましたが、彼らの中には銀行口座を持たず、国が所得を把握できていない大金持ちが大勢いたそうです。タンス預金を無効化することで、彼らに銀行口座を作らせ、旧紙幣を新紙幣に交換させて所得を把握し、適正な課税を行うのが突然の高額紙幣廃止の目的だったと聞きました。

しかし、そのため日常経済は大混乱、1ヶ月経過しても、銀行員ですら新紙幣を見たことがないという状態でしたが、3ヶ月を経過するころから、ようやく新紙幣が流通しはじめました。なんでも、インクが無くなってしまって、新札の印刷が大幅に遅れたとか・・・・・。この間、小さな商店でもカード決済が始まり、カード支払いのタクシーが現れ、キャッシュレス化が一気に進んだのは見事でした。

●日本企業専用工業団地

インドには日系のデパート、スーパー、ショッピングモール、コンビニなど一切無く、日本の食材や酒類もまず入手は困難、日本料理店もごく限られますし、浴槽は無いのが当たり前です。日本のＴＶ放送も見られません。また、何より、インド人諸氏は日本に関する知識がほとんど無く、関心も低いので、日本人にとってインドは、とてもハードルが高い国のようです。曰く、「インドで過ごせれば、世界中どこ行っても OK」、そしてインドに限らないでしょうが、駐在員同士で語り合うと必ずと言っていいほど出てくる決まり文句「OKY」。 OKY は、ご存知の方も多いと思いますが、現地の実情を理解していない日本のからの指示、無理難題に対して 「オマエ、ココニキテ、ヤッテミロ」 という駐在員の感情を表しています。

さて、このようにハードルの高いインドにあって、日本企業専用の工業団地建設が進んでいます。ここには、日本式のホテル、和食レストラン、大浴場、カラオケ居酒屋、公園などが設けられ、日本人が快適に過ごせるよう配慮されています。大きな工場でも、駐在する日本人は数名程度（2～3 名が最も多いようです）ですから、多くの企業、工場が集まらないとこのような施設は作れません。

・ニムラナ

デリー南部、ラジャスタン州にある工業団地で、小生も 2 度訪問しました。自動車関連の日系企業 47 社が入居されています。周囲はほぼ砂漠なので、乾季には 50℃近い熱波に耐えなければなりませんが、日本人向けホテルと和風レストランがいくつかあります。このような所を訪問すると「仕事より和食」になってしまいます（写真：工業団地内ホテルと豚しょうが焼き定食）。

・ギロット

ニムラナがほぼ満杯になったため、近くに造成した新たな工業団地です。

・マンダル

モディさんの地元グジャラート州の工業団地です。同州には、すでに日系大手の自動車工場が複数進出されていますが、「禁酒州」なので、個人的にはその点が大いに気になります。

・スパ

ムンバイから車で 3 時間ほどのプネ市郊外にあります。このあたりは、デカン高原の高地で比較的過ごし易い気候です。日系だけでなく、ドイツ高級車(ベンツ、BMW)の工場もあり、インドのデトロイトと呼ばれています。

・トヨタテクノパーク

南インドのバンガロール郊外にある、その名が示す通りの工業団地です。もちろん、系列の部品メーカーさんも集まっています。

しかし、当社の社員に限らず、ここへはインド人は行きたがりません。正門での身分確認、カバンの中身の検査、そして構内に入ると、白線の通りに歩かなければならない（道路を斜めに横切ってはいけない）など、日本式のルールが徹底されていますので、窮屈に感じるのだと思います。

IT 産業の拠点として知られるバンガロールの中心部には日本式ホテル、和食レストラン、和風居酒屋もあり、標高 1,000m の高原に位置する、日本人にとっては、住みやすい都市の一つでしょう。また、この州（カルナタカ州）は、牛肉 OK です。

また、南インドは、アーリア人の侵攻から逃れたインド原住民のドラヴィダ人の人達が築いた王国が栄えた地域で、特にマイソールには見事な王宮や寺院が今も残っており、大勢の観光客で賑わっています。

さて、本通信も第 3 号となって、ネタも尽きてまいりました。 インド各地に展開する商社や銀行の駐在員の方々は、もっともっと様々な経験を積んでいらっしゃるのだと思いますが、小生が 3 年弱の駐在で経験したこと、学んだことなど紹介させていただきました。幸い、駐在中、身の危険を感じるような状況に置かれることもなく、盗難にも会わず、たまに風邪を引く程度で、医者のお世話になることもありませんでした。ただ、デリーへの出張時に宿泊したホテルで、「昨日、すぐ近くで女性の死体が見つかった。外国人は目立つので、外出しないように」と忠告を受けたことがあります。そのホテル周辺は、インド・マフィアのテリトリーだと後から知りました。

今後も、新たな体験、新しい動きがあれば、皆様にご紹介させていただければと考えております。

最後になりましたが、これからインドに進出してみよう、インドへ行ってみようという方々にとって、本通信が何らかの参考になれば幸いです。

－以上、第 3 号－